



## クローズアップ CLOSE UP

### みんな参加のイベント

12月7日～20日、まえばし☆みんなのえいがさいを開催。映画上映のほか、市聴覚障害者福祉協会長・山田浩臣さんのトークイベントや福祉事業所利用者によるレモネードスタンドなどを実施。また、14日にはみんなのフェスタを開催。ステージイベントや作品展示などをしました。



### 物語紡ぐ作家と編集者

前橋文学館で「いまを編集するー月刊『新潮』創刊120周年記念展」を1月26日(日)まで開催中。関連企画として、12月14日に芥川賞作家・九段理江さんと「新潮」編集長・杉山達哉さんの対談を開催。九段さんの創作手法や、作家と編集者との関係性などが語られました。



### 戦禍の記憶を語り継ぐ

前橋空襲で米軍が狙ったとされる爆撃照準点にマンホールと説明板、この地域の旧町名である桑町の案内板を設置。マンホールは中心商店街の中央通り丁字路にあるマンホールのふたを交換し、案内板などは近くのグリーンウォークエントランスの壁に掲示しています。

1月12日(日)開催の前橋文学館リーディングシアター「誠実と不条理」は本市生まれの詩人・平井晩村の物語。演劇歴41年の生方さんが脚本と演出を手掛ける(関連記事は本紙13ページ)。

「平井晩村は『草津節』の原形や前橋中学校(現・県立前橋高)校歌の作詞など、多作で才能あふれる詩人。しかしその人生は多くの大切な人を亡くすという不条理なものでした。その中で子を思い、たくさん作品を残した晩村の生き方を知ってもらいたいです」

リーディングシアターには晩村の母校である県立前橋高の演劇部員と応援団も出演する。「演劇部員には晩村を体感して、彼のように一生懸命取り組むことの大切さを知ってもらいたい。公演を通して、晩村の人間性や作品を知るきっかけになればと思います」

昨年11月に旗揚げ公演をした50歳以上の演劇創作ユニット・百花繚乱の代表も務める生方さんは、「多くの演劇人には演劇を辞めなければいけないときが来ます。また、本当は演劇をやったみたいけれど叶わなかったという人もいます。演劇の世界で何ができるかを考えたとき、そんな人たちの果たせなかった夢を叶える場所を作ろうと思いました」と語る。

若手からシニアまで、演劇の道を閉ざしたくないという生方さんの思いが、演劇という文化をつないでいく。

組むことの大切さを知ってもらいたい。公演を通して、晩村の人間性や作品を知るきっかけになればと思います」

昨年11月に旗揚げ公演をした50歳以上の演劇創作ユニット・百花繚乱の代表も務める生方さんは、「多くの演劇人には演劇を辞めなければいけないときが来ます。また、本当は演劇をやったみたいけれど叶わなかったという人もいます。演劇の世界で何ができるかを考えたとき、そんな人たちの果たせなかった夢を叶える場所を作ろうと思いました」と語る。

若手からシニアまで、演劇の道を閉ざしたくないという生方さんの思いが、演劇という文化をつないでいく。



富士見町市之木場で農業を営む樺澤清司さんは、国が定める基準をクリアして栽培された有機農産物などに与えられる「有機JAS認証」を取得しています。

就農した当初は、化学肥料や農薬を使いながら栽培していましたが、知人に青汁用の有機野菜を作ってほしいと頼まれたことがきっかけで、平成15年

「有機農業とは、化学肥料や農薬、遺伝子組み換え技術を原則使わず、環境への負荷をできるだけ低減した方法で行う農業です。」

富士見町市之木場で農業を営む樺澤清司さんは、国が定める基準をクリアして栽培された有機農産物などに与えられる「有機JAS認証」を取得しています。

就農した当初は、化学肥料や農薬を使いながら栽培していましたが、知人に青汁用の有機野菜を作ってほしいと頼まれたことがきっかけで、平成15年

旬な農産物や生産者を紹介するこのコーナー。今回は有機農業を紹介します。



固 農政課  
☎ 027-898-5841



樺澤清司さんと吉田龍斗さん

に有機農業へ転換しました。栽培する野菜は全て有機農業で作られたもの。ブロッコリーやミニ白菜、珍しいものだとターサイなど、リピーターの希望に添えていくうちに、現在では4畝の農地で20種類ほどの野菜を栽培しています。

「有機農業はこまめな除草や病害虫対策が大変です。しかし消費者に野菜本来のうまみを味わってもらいたいという思いで栽培しています。おいしいと言われることが一番の励みです」と樺澤さん。

現在は孫の吉田龍斗さんが後を継ぎ、有機野菜の魅力を広めようと一緒に取り組んでいます。

「今後は耕作放棄地を使い、さらに規模を拡大していきたいです」と龍斗さん。

祖父と孫の二人三脚で挑む有機農業は、さらなる高みを目指し走り始めています。